

[論文]

ローマ書の統一性についての文献学的考察

原 口 尚 彰

問題の所在

ローマの信徒への手紙（以下、「ローマ書」と略記する）は使徒パウロが（ロマ 1: 1）、ローマ帝国の東半分を構成するギリシア語圏での伝道を終えた時点で（15: 14-21）、コリントからローマの教会へ書き送った手紙で（1: 5-6, 10-15）、16章からなる長大な書簡であるが、統一性に関して本文批判と文献批判の両面で様々な疑問が提起されている。

第一に、ローマ書の結びの頌栄句 16: 25-27 の本文中の位置については、写本の読みが分かれており、16: 21-23 の後に置いているもの（ \mathfrak{P}^{61} * B C D 81. 365. 630. 1739. 2464 et al.）の他に、14: 23 の後に置いているものや（L Ψ 0209^{vid} 1175. 1241. 1505. 1881 \mathfrak{M} et al.）、15: 33 の後に置いているものがある（ \mathfrak{P}^{46} ）。さらに、マルキオン聖書においてローマ書は、14: 23 で終わっており、15: 1-16: 27 の部分は存在していない。ローマ書の結びの部分の写本の読みがこのように大きく分かれている以上は、本文批評の作業を行ってローマ書の原初的形態についての判断を下す必要がある。

第二に、イスラエルの運命についての記述である 9: 1-11: 36 の存在が問題になる。ローマ書の本論において、ピステイス（信、信実、信仰）を通して与えられる神の義を論じる 1: 18-8: 39 と、世界における信徒の生き方を語る 12: 1-15: 29 の間の繋がりを断ち切る形で、ユダヤ人と異邦人の究極的救いについての記述である 9: 1-11: 36 が存在している。そこで、この部分が後から挿入されたと考えるべきなのか、それとも、初めからローマ書の構成部分として存在していたのかということについて判断する必要がある。

第三に、16: 1-20 の部分においてパウロは、宛先の教会の構成員の名前を具体的に挙げて挨拶しているが、その人数が非常に多く、パウロ書簡として異例に長大なリストとなっている。まだ訪問したことがない教会の構成員の名前をパウロがこれ程多く知ることが出来たのかどうかを疑問視して、この部分は、ローマに宛てた手紙のコピーが後にエフェソへ送られる際に、付け加えられたエフェソ教会に宛てた挨拶文ではないかという説が出

されている¹。ローマ書の統一性を維持するならば、この問い掛けに対しても答えなければならない。

第四に、現存のローマ書は、元々別々に書かれた複数の書簡が事後的に一つの手紙にまとめられたものであるとする複合書簡説が存在している。例えば、木下順治はローマ書の成立について独自の仮説を立て、ローマの異邦人信徒達に宛てた原ローマ書と（ロマ 1: 1-32; 2: 6-16; 3: 21-26; 5: 1-11; 8 章, 12-13 章, 15: 14-33）、ユダヤ人との論争のための覚え書きと（2: 1-5; 2: 17-3: 20; 5: 17-7: 25; 9-11 章; 14: 1-15: 13）、フィベの推薦状（16 章）とがエフェソの教会において一つの手紙の体裁に仕立てられたとしている²。

他方、ドイツの新約学者 W・シュミットハルスは、近年、ローマ書の注解書において、現存のローマ書は別々に執筆された三つの手紙が一つにまとめられて現在の形になっているという大胆な説を唱えて注目されているので、この分割仮説に対しても吟味する必要がある。

本論考は、以上の四点について本文批判と文献批判の両面から考察し、一定の結論を得ることを目的としている。ローマ書の統一性問題は古くて新しい問題であり、あらゆるローマ書研究の前提をなす基礎研究として、繰り返し取り組まなければならない課題である。

1. 本文批評と統一性問題

ローマ 16: 25-27 の本文上の配置について、ネストレ=アラント 28 版の脚注に従って、主要写本がどのような読みを伝えているかを一覧表にすると以下ようになる³。

- (1) F G 629 Hier^{ms}: 1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 24
- (2) マルキオン聖書: 1: 1-14: 23
- (3) $\mathfrak{P}^{61} \times B C D 81. 365. 630. 1739. 2464 ar b vg sy^p co Or^{lat mss} Ambst$: 1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 23 (24) + 16: 25-27

¹ T.W. Manson, "St. Paul's Letter to the Romans and Others," in *Romans Debate* (ed. K.P. Donfried; Revised and Expanded ed.; Peabody, MA: Hendrickson, 1991) 3-15.

² J. Kinoshita, "Romans Two Writings Combined: A New Interpretation of the Body of Romans," *NovTest* 7 (1964-65) 272-277; 木下順治『新解・ローマ人への手紙』聖文舎, 1983 年, 7-168 頁を参照。

³ E. Nestle - K. Aland, *Novum Testament Graece* (28. revidierte Auflage; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012) 517; さらに, K. Aland, *Text und Textwerte der griechischen Handschriften des Neuen Testaments II. Die paulinischen Briefe* (Berlin: Waler de Gruyter, 1991) 447-451; B.M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament* (2nd ed.; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1994) 470-473 も参照。

- (4) P⁴⁶ : 1 : 1-15 : 33 + 16 : 25-27 + 16 : 1-16 : 23
- (5) L Ψ 0209^{vid} 1175. 1241. 1505. 1881 M et al. : 1 : 1-14 : 23 + 16 : 25-27 + 15 : 1-16 : 24
- (6) A P 33. 104 et al. : 1 : 1-14 : 23 + 16 : 25-27 + 15 : 1-16 : 23 (24) + 16 : 25-27
- (7) 1506 : 1 : 1-14 : 23 + 16 : 25-27 + 15 : 1-33 + 16 : 25-27

ネストレ＝アラントの28版の本文は、第一の読み方が最も原型に近いと判断している⁴。外的証拠からは、第三の読みが有力であるが、16 : 25-27の頌栄句は文体・内容の点からパウロ書簡としては異例である。真正パウロ書簡の結びの句は、通常はキリストの恵みと神の愛が与えられることを祈る祝祷句である（I コリ 16 : 23 ; II コリ 13 : 13 ; ガラ 6 : 18 ; フィリ 4 : 23 ; I テサ 5 : 28 ; フィレ 25）⁵。神に栄光を帰す典礼的な頌栄句は、時折、論述の切れ目を示す句として使用されているが（ロマ 11 : 36 ; ガラ 1 : 5 ; フィリ 4 : 20）、手紙の末尾には置かれていない。また、ロマ 16 : 25-26の典礼的な用語・文体や、神の永遠の奥義がキリストの福音において啓示されたという内容は、真正パウロ書簡よりもむしろ、第二パウロ書簡のエフェソ書や牧会書簡の内容に近い（エフェ 3 : 3-11 ; II テモ 1 : 9-11 ; テト 1 : 2-3）⁶。従って、この部分はローマ書本文に後から付け加えられた編集句である可能性が強い⁷。さらに、16 : 24を有力写本の多くは伝えていないので、この節も

⁴ Ibid. 517 ; さらに、H. Lietzmann, *An die Römer* (HNT 8a ; 4. Aufl. ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1933) 130 ; C.K. Barrett, *A Commentary on the Epistle to the Romans* (London : Black, 1957) 13 ; H. Gamble, *The Textual History of the Letter to the Romans* (Grand Rapids : Eerdmans, 1977) 23-29 も参照。

⁵ Gamble, 123-124 ; J.A. Fitzmyer, *Romans* (AB33 ; New York : Doubleday, 1993) 62. 尚、祝祷と頌栄の違いについては、J.A.D. Weima, *Neglected Endings : The Significance of the Pauline Letter Closings* (JSNTSup 101 ; Sheffield : JSOT, 1994) 135-136 を参照。

⁶ Gamble, 123-124 ; R.F. Collins, "The Case of a Wandering Doxology : Rom 16, 25-27," in *New Testament Textual Criticism and Exegesis* (ed. A. Denaux ; Leuven : University Press, 2002) 293-303 を参照。これに対して、エフェソ書や牧会書簡にパウロの真筆性を認める研究者は、ロマ 16 : 25-27の真筆性を認める。L.W. Hutardo, "The Doxology at the End of Romans," in *New Testament Textual Criticism : its Significance for Exegesis* (FS. Bruce M. Metzger ; eds. E.J. Epp and G.D. Fee ; Oxford : Clarendon, 1981) 191, 197-198 ; R.N. Longenecker, *Introducing Romans : Critical Issues in Paul's Most Famous Letter* (Grand Rapids : Eerdmans, 2011) 37 ; Pate, 326 を参照。また、Weima, 142-144 ; L.T. Johnson, *Reading Romans : A Literary and Theological Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 1997) 221-223 は、先行するロマ 1 : 16 や 3 : 21 や 15 : 5-13 の内容がロマ 16 : 25-27 に対応しているとして、パウロの真筆性を認めている。

⁷ C.H. Dodd, *The Epistle of Paul to the Romans* (London : Hodder and Stoughton, 1932) xvii ; Lietzmann, 131 ; O. Michel, *Der Brief an die Römer* (KEK ; 12. Aufl. ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1966) 24 ; Barrett, 11-12, 286 ; C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (2 vols ; Edinburgh : T & T Clark, 1973-1979) 1.8 ; 松木治三郎『ローマ人への手紙 翻訳と解釈』日本基督教団出版局、1966年 580-581頁 ; Gamble, 24, 123-124 ; H. Schlier, *Der Römerbrief* (HThK 6 ; 2. Aufl. ; Freiburg : Herder, 1979) 451-455 ; W.H. Ollrog, "Die Abfassungsverhältnisse von Röm 16," in *Kirche* (FS. G. Bornkamm ; hrsg. v.

二次的付加であると判断できる。すると、ローマ書の原型は 1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 23 であると推定されることになる⁸。これに対して、P・ランベは、ロマ 1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 23 を構成内容とする本文型を伝える写本が現存しないので、第一の読み (F G 629 et al.) が示すように 16: 24 を含んだ 1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 24 の形が原初的であると主張し、一部の注解者が賛成している⁹。しかし、頌栄句 16: 24 については、最も古い写本 (P⁴⁶ P⁶¹ ⋈ B C 他) は伝えておらず、より後期に成立した写本 (D G L Ψ 629. 630. 1175. 1241. 1505. 1881. M ar vg^d sy^h) が支持しているだけである¹⁰。さらに、内的証拠の点からしても、一般則として、短い本文の方がより原型に近い場合が多いので、16: 24 を含まない形が原型であると判断し、ネストレ=アラントの 28 版の本文を支持する¹¹。

第二の読み方が示すマルキオン版のローマ書が 14: 23 で終わっているのは、ユダヤ人教会への異邦人教会の献金を持って行くためにエルサレム旅行を企画していることを述べる部分と (15: 25-29)、異端への警告を述べる部分⁸ (16: 17-20)、マルキオンには不都合に見えたために 15: 1-16: 27 の部分をそっくり削除したのであろう¹²。

第三の読み方は、1: 1-14: 23 + 15: 1-16: 23 からなる本文原型に、頌栄句 16: 25-27 を付け加えて書簡の結びの体裁を整えている。多くの有力な大文字写本の読み方に見られるように、四世紀のアレクサンドリアにおいてはこの読み方が最も有力となっていた。

第四の読み方は、二世紀遡る写本である P⁴⁶ だけが示している特異な異読であるが、二次的な本文の反映である。頌栄句は文書の結びに使用されるのが常であるので、写字生が頌栄句を 16 章末尾の 16: 25-27 の位置から、文書の 15: 33 の後にわざわざ移すとは考

D. Lührmann / G. Strecker ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1980) 221 ; K. Aland, *Der Text des Neuen Testaments* (Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft, 1981) 297 ; J.K. Elliott, "The Language and Style of the Concluding Doxology to the Epistle to the Romans," *ZNW* 72 (1981) 124-130 ; B. Byrne, *Romans* (Sacra Pagina 6 ; Collegeville : The liturgical Press, 1996) 29 ; K. Haacker, *Der Brief des Paulus an die Römer* (ThHNT 6 ; Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 1999) 18 ; D. Starnitzke, *Die Struktur paulinischen Denkens im Römerbrief. Eine linguistische-logische Untersuchung* (Stuttgart : W. Kohlhammer, 2004) 477 ; R. Jewett, *Romans* (Hermeneia ; Minneapolis : Fortress, 2007) 18-19 ; 田川建三『新約聖書 訳と註 4』作品社, 2009 年, 357 頁 ; F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen : Mohr-Siebeck, 2013) 214-215.

⁸ K. Aland, "Der Schluß und die ursprüngliche Gestalt des Römerbriefes," in ders., *Neutestamentliche Entwürfe* (München : Kaiser, 1979) 284-301 (特に, 295-297) ; J.A. Fitzmyer, *Romans* (AB33 ; New York : Doubleday, 1993) 50.

⁹ P. Lampe, "Zur Textgeschichte des Römerbriefes," *NovTest* 27 (1985) 272-277 ; Gamble, 130 ; Jewett, *Romans*, 4-6.

¹⁰ A.J. Hultgren, *Paul's Letter to the Romans : A Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 2011) 20-21 を参照。

¹¹ 田川, 356-357 頁を参照。これに対して, Gamble, 130 は 16: 24 を本来的であると見る。

¹² E. Lohse, *Der Brief an die Römer* (KEK ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2003) 51 を参照。

えにくい。この読み方は、1: 1-15: 33 + 16: 25-27 の読みを示す現存しない写本の読み方と第三の読み方とを混合して作り出したものであろう。

第五の読み方は、ビザンティン型写本の多くが採用している。これはマルキオン聖書に頌栄句の 16: 25-27 を付け加えた本文に、第三の読み方を組み合わせて作り出されたのであろう。この操作の結果、16: 1-23 の後に結びに相応しい句が必要となり、パウロ書簡末尾の祝祷句の例にならって (I コリ 16: 23; II コリ 13: 13 他)、16: 24 が付け加えられている。

第六と第七の読み方は、既成の読みを組み合わせて作られた折衷的な読みである。第六の読み方は、第三と第四の読み方を組み合わせたものである。第七の読み方は、第三と第五の読み方を組み合わせた上で、16: 1-16: 23 (24) の部分を削除して作られている。

2. 文献批判と統一性問題

2.1 ローマ書 9-11 章と統一性問題 (9: 1-11: 33)

基本的な人間観と救済論を提示する教理的部分には、通例であれば、信徒の生き方を提示する倫理的部分が続く (例えば、ガラ 2: 15-4: 31 と 5: 1-6: 10 を参照)。しかし、ローマ書の場合は、教理的記述である 1: 18-8: 39 と倫理的記述である 12: 1-15: 29 の間を分断する形で、ユダヤ人と異邦人の究極的救いについての記述である 9: 1-11: 36 が存在している。このために、イギリスの聖書学者 C・H・ドッドは、この部分がイスラエルの運命について論じた独立の論説であり、後からローマ書に挿入されたものであると論じた¹³。しかし、この部分がローマ書の本来の構成部分であることは、以下の理由により支持される。

イスラエルの躓きと救いを論じる 9: 1-11: 36 の部分は、修辞学的には、本題から一時離れて違う主題を取り上げる脱線 (digressio) と評価出来る (キケロ『発想論』 1.51.91; クウインティリアヌス『弁論家の教育』 4.3.12-17)。

他方、この部分は前後の文脈から独立しているとはいえ、書簡全体の主題とは共鳴している。例えば、業による義を追い求めたユダヤ人が義に達せず、異邦人がピステイスによる義を得ることとなったという 9: 30-10: 4 の記述は、論証部分の中核を構成する 3: 21-28 の内容の適用である。11: 25-32 に述べられているユダヤ人と異邦人の救いという結論は、書簡の冒頭部に提示された提題 (1: 16-17 を参照) の成就を終末論的希望の

¹³ C.H. Dodd, *The Epistle of Paul to the Romans* (London: Hodder and Stoughton, 1932) 148-150.

視点より論じている¹⁴。ローマのキリスト教は元々ユダヤ人の中から始まったという経緯があり、その後の歩みの中で次第に異邦人信徒が多数になったとはいえ（1：5-7, 13；11：13；15：7-13, 15-16）、依然としてローマにはユダヤ人信徒が存在し、ローマ教会は異邦人とユダヤ人からなる混成教会であったので（14：1-15：13；16：3-4, 7を参照）、ユダヤ人と異邦人の究極的救いを論じたこの部分は、聴衆の関心がある主題を取り扱っていると言えよう。神は公平であり（2：11）、ユダヤ人と異邦人の神（3：29）であることが、ここでは救済史的展望のもとに明らかにされる（特に、11：11-36を参照）¹⁵。

パウロがローマ書の中に9：1-11：36の部分を設けた理由は、彼がマケドニアやアカイアの教会から集めた献金を、原始教会へ届けるためにエルサレム旅行を目前に控えているという事情に求められる（15：25-27）。パウロはユダヤ人であり（ロマ9：2；フィリ3：5を参照）、元々は熱心なユダヤ教徒であり、教会の迫害者であったが、復活のキリストとの出会いによってキリストの使徒となった前歴を持つ（Iコリ15：8-10；ガラ1：13-17；フィリ3：5-11を参照）。特に、律法から自由な福音を宣教するパウロは（ガラ1：11-12；2：4-5；2：15-21；ロマ3：21-26；9：30-10：4）、ユダヤ教の側からすると棄教者であり、父祖達の宗教の根本を否定する者となるので、ユダヤ人の強い反発が予想されるのである（ロマ15：30-32を参照）。

2.2 ローマ書 16 章と統一性問題

現存のローマ書の統一性に疑問を呈し、16：1-20の部分は、ローマに宛てた手紙のコピーが後にエフェソへ送られる際に、添えられたエフェソ教会宛の挨拶文ではないかという説を、T.W. Manson らが提唱しており、かつては支持する意見も多かった¹⁶。ローマ書 16 章がエフェソに宛てたものであるとする説の実質的な根拠は、以下の通りである。

- (1) 二世紀に遡る古い写本である P⁴⁶ は、16：25-27の頌栄句を、16章の末尾ではなく、15：33の後に置いている¹⁷。

¹⁴ U. Wilckens, *Der Brief an die Römer* (2.Aufl.; EKK VI/1; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989) I 19-21 を参照。

¹⁵ M.J. Debonné, *Enthymemes in the Letters of Paul* (LNTS 303; London: T & T Clark, 2006) 175-177 は、この部分に見られる神義論的契機を重視している。

¹⁶ T.W. Manson, "St. Paul's Letter to the Romans and Others," in *Romans Debate* (ed. K.P. Donfried; Revised and Expanded ed.; Peabody, MA: Hendrickson, 1991) 3-15; E.J. Goodspeed, "Phoebe's Letter of Introduction," *HTHR* 44 (1951) 55-57; H.M. Schenke, "Aporien im Römerbrief," *ThLZ* 92 (1967) 881-884; J.I.H. McDonald, "Was Romans 16 a Separate Letter," *NTS* 16 (1969-70) 369-372; Käsemann, 394-396; W. Schmithals, *Der Römerbrief. Ein Kommentar* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1988) 27-28, 544-547.

¹⁷ Manson, in *Romans Debate*, 10-14.

- (2) パウロが未訪問のローマ教会の信徒たちの個人名をこれほど多く知っているのは不自然であることに加えて、16章において挨拶の相手として名前を挙げられている者たちの中に、プリスカとアキラや（使18：1-3, 18-19；ロマ16：3；Iコリ16：19）、アジアの初穂エパイネト（ロマ16：4）のように、エフェソでパウロと関係を持った者たちがいる¹⁸。
- (3) 異端的教えへの厳しい警告を内容とするロマ16：17-20は、挨拶を内容とするローマ書16章の文脈に合わず、ローマの教会の実情とも対応しないが、エフェソの長老に向けられたミレトス説教の内容と平行しており（使20：17-35を参照）、エフェソの教会へ宛てられたものとして理解できる¹⁹。
- (4) ロマ15：33と16：20bの両方に書簡末尾に用いられる祝祷句が出て来ていることは、ローマ書が元々は15：33で終わっていたことを示唆している²⁰。
- (5) 16：20bにある祝祷句の後に、16：21-23の挨拶が続くのは不自然であり、手紙の本来の結びの後に事後的に付加されたと考える方が自然である。
- (6) 挨拶だけからなる書簡は古代世界に存在した²¹。

第一の議論は、 \mathfrak{P}^{46} という一つのパピルス断片の読みだけに依拠しており、本文批評上の根拠が弱い。 \mathfrak{P}^{46} は二世紀に遡る古い写本ではあるが、上記の本文問題の検討で明らかになったように、必ずしも最も原型に近い本文型を伝えていないのである。

第二の議論については、挨拶のリストに出てくる人たちの中には、プリスカとアキラのように、ローマの教会出身の信徒でコリントやエフェソでパウロの同労者として働いた者たちもあるので（使18：1-3, 18-19；ロマ16：3；Iコリ16：19）、パウロが彼らを通してローマの教会の内部事情に通じていた可能性がある²²。また、エパネイエトのように、アジア州でパウロと出会って回心した信徒達もあるし（16：5）、アンドロニコスやユニアのようにパウロと共に宣教活動の過程で入獄した体験を持つ人々などもあり、パウロとローマの信徒達の間には共通の知人も存在した（16：7）。これらの人々は、皇帝クラウディウスの死後、ユダヤ人追放令が無効になってから、ローマに移住し、ローマの教会の指導的メ

¹⁸ Schmithals, 546-547.

¹⁹ Manson, in *Romans Debate*, 13.

²⁰ *Ibid.*, 8.

²¹ A. Deissmann, *Licht vom Osten* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1923) 199-200.

²² Ollrog, 238-242; Fitzmyer, 60.

ンバーになっていた可能性がある²³。

第三の議論には一理ある。異端的教えへの厳しい警告を内容とするロマ 16: 17-20 は、挨拶を内容とするローマ書 16 章の文脈に合わず、使徒言行録が伝えるミレトス説教の内容と平行している（使 20: 17-35 を参照）。しかし、そこで問題となっているような異端的教えの問題は、パウロの時代のエフェソよりも、使徒後時代の一世紀末の状況に当てはまる。この部分は、一世紀末にローマ書末尾に書き加えられた編集句であると考えられるべきであろう²⁴。

第四、第五の議論は、書簡の本文が完結する前に祝祷句が出てくるのが不自然であるという文章形式上の根拠に基づいている。パウロは書簡を口述筆記する際に、文書の結びでなくても、論述の流れの切れ目のところに祝祷句を置くことがあり（ロマ 5: 21; 15: 13）、ローマの信徒たちの名前を列挙した挨拶の後に（16: 3-20a）、執筆場所でパウロと共にいる人々の挨拶の言葉を並べ始める前に（16: 21-23）短い祝祷句が置かれてもそれ程不自然ではない。

第六の議論は、ローマ 16 章が独立の手紙である可能性を示す傍証として主張されており、挨拶だけからなる手紙など考えられないという批判に対する反論となっている。ゲイスマンやマクドナルドが具体的に指摘しているように、古代書簡の中に主として挨拶からなる手紙が存在したのは事実である（BGU 601; P. Oxy 1300, 1679 他）²⁵。しかし、そのことが直ちにローマ書 16 章が独立の手紙であったことを示す根拠になる訳ではない。I テサ 5: 26; I コリ 16: 19-20; II コリ 13: 12; フィリ 4: 21-22 に見られるように、個人的に良く知っている教会に対して、パウロは書簡の末尾の挨拶において、個々の会員の名前を挙げることを通常はしないが、ローマ書のように未訪問の教会に向けて書かれた手紙の末尾については、これから親しい関係を築くために個人名を列挙した挨拶のリストを付した可能性は存在するのである²⁶。

²³ Dodd, xx-xxi; Lietzmann, 128-129; Fitzmyer, 60; K.P. Donfried, "A Short Note on Romans 16," *Romans Debate*, 44-52; P. Lampe, *Die stadtrömischen Christen in den ersten beiden Jahrhunderten* (WUNT 2.18; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1987) 124-135; ders., "The Roman Christians of Romans 16," *Romans Debate*, 216-230; Byne, 11-12; T.S. Schreiner, *Romans* (Grand Rapids: Baker, 2004) 9; B. Witherington III, *Paul's Letter to the Romans: A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2004) 6 を参照。

²⁴ これに対して、Schreiner, 10; C.M. Pate, *Romans* (Grand Rapids: Baker, 2013) 326 は、この部分が本来の構成部分であるとする。

²⁵ Deissmann, 199-200; McDonald, 370-372.

²⁶ Cranfield, I.10; J.D.G. Dunn, *Romans 9-16* (WBC 38B; Dallas: Word Books, 1988) 884-885; Schreiner, 9; Witherington III, 5; C.G. Kruse, *Paul's Letter to the Romans: A Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2012) 13-14; S. Mathew, *Women in the Greetings of Romans 16.1-16: A Study of Mutuality and*

2.3 複合書簡説と統一性問題

2.3.1 木下順治の複合書簡説

木下順治はローマ書の統一性について疑問を持ち、現存のローマ書は以下の三つの文書がエフェソで事後的に編集されて成立したと推定している²⁷。

- A. 原ローマ書（ロマ 1: 1-32; 2: 6-16; 3: 21-26; 5: 1-11; 8 章, 12-13 章, 15: 14-33)
- B. ユダヤ人との論争覚え書き（2: 1-5; 2: 17-3: 20; 5: 17-7: 25; 9-11 章; 14: 1-15: 13)
- C. フィベの推薦状（16 章）

木下によれば、パウロがローマに書き送った元の書簡は、専ら異邦人信徒を対話の相手として想定していた（ロマ 1: 1-32; 2: 6-16; 3: 21-26; 5: 1-11; 8 章, 12-13 章, 15: 14-33）。これに対してパウロがエフェソで書き記した覚え書きは、ユダヤ人達との論争のために書かれたもので（2: 1-5; 2: 17-3: 20; 3: 27-4: 25; 5: 17-7: 25; 9-11 章; 14: 1-15: 13）、両者の想定する神学的対話の相手は異なっている。このようにローマ書 1-15 章の背後に二つの文書の存在を想定すれば、それぞれの文書の論旨は一貫し、現存のローマ書の記述のところどころに見られる繋がり不具合を解決出来る²⁸。また、原ローマ書と論争覚え書きは、神学的な視点が異なり、前者が神の恵みの業による義の啓示と和解と霊の働きを強調しているのに対して（特に、3: 21-26; 5: 1-11; 8 章）、後者は律法の業によらずキリストのピステイスによって人が義とされることを強調している（3: 27-4: 25; 5: 17-7: 25; 9-11 章）。

ローマ書 16 章は、 Φ^{46} が示しているように、本来のローマ書の構成的部分ではなく、フィベを紹介する推薦状であり、エフェソ教会に集まっていた小アジアの教会指導者達に宛てパウロが書いた別個の書簡であった²⁹。エフェソの教会において、原ローマ書と論争覚え書きが編集されて一つの手紙の体裁に仕立てられ、さらに、挨拶からなるフィベの推薦状

Women's Ministry in the Letter to the Romans (London: Bloomsbury T & T Clark, 2013) 3-4, 37-45 を参照。

²⁷ Kinoshita, "Romans_Two Writings," 272-277; 木下『新解』, 7-168 頁を参照。

²⁸ Kinoshita, "Romans_Two Writings," 261-275; 木下『新解』, 111-131 頁。

²⁹ 木下『新解』, 150-168 頁。

が付け加えられた写本が、アレクサンドリアに伝えられたとしている³⁰。

この文書仮説には幾つかの難点がある。第一に、木下はローマの教会は専ら異邦人信徒から構成され、ユダヤ人信徒は殆どいないと想定している³¹。パウロがローマ書を執筆した時、ローマの教会が主として異邦人信徒によって構成されていると想定していたのは事実である（ロマ 1: 7, 13-15 を参照）。しかし、ローマ書 16 章には、プリスカとアキラの夫婦や（ロマ 16: 3）、マリアヤ（16: 6）、アンドロニコスとユニア（16: 7）、ヘロディオン等の（16: 11）指導的ユダヤ人信徒の名前が列挙されており、ローマの教会にある程度の数のユダヤ人信徒がその時点で存在していたことを示している。皇帝クラウディウスの死後、ユダヤ人追放令が無効となり、ユダヤ人信徒達が首都に戻って来て活動していた可能性は否定できない。

第二に、ローマ 15 章の記述を異邦人向けの部分とユダヤ人向けの部分に分け、前者を原ローマ書、後者を論争覚え書きとすることには無理がある。福音はユダヤ人と異邦人の両方に向けられているとパウロは考えている（ロマ 1: 14, 16; 3: 29; 9: 24, 30; 10: 12; 11: 25）。神はユダヤ人と異邦人の両方の神であり（3: 29）、ユダヤ人も異邦人も等しく罪の下にあり（3: 9）、神の裁きに服している（2: 9）。パウロはローマ書の中で、ユダヤ人と異邦人に交互に言及した後に（例えば、1: 18-32 と 2: 1-4, 2: 17-24 と 2: 25-3: 8, 9: 1-18 と 9: 19-29, 10: 5-11: 10 と 11: 11-24）、両者を一括して論じるのが通例であり（2: 5-11; 3: 9-20; 9: 30-10: 4; 11: 25-36）、ユダヤ人に言及する部分と異邦人に言及する部分とは、相互に結びついて一つの論述を作り上げている。

第三に、木下はローマ書 16 章が元々別の文書であったという根拠に、 \mathfrak{P}^{46} において、15: 33 の直後に 16: 25-27 の頌栄句が置かれていることを挙げている³²。先に述べたように、 \mathfrak{P}^{46} という一つのパピルス断片の読みだけに依拠する議論は、本文批評上の根拠が薄弱である。 \mathfrak{P}^{46} は 16: 25-27 の後に、16: 1-23 の部分も伝えており、15 章だけで終わってはいないし、写本全体としては混合型を示しており、必ずしも最も原型に近い本文型を伝えていない。

2.3.2 シュミットハルスの複合書簡説

W・シュミットハルスは 1988 年に刊行したローマ書の注解書において、現存のローマ書が本来独立に書かれた書簡が編集されて成立したとする複合書簡説を唱えて注目され

³⁰ 木下『新解』、150-168 頁。

³¹ Kinoshita, “Romans_Two Writings,” 258-261; 木下『新解』、13-14, 103-111 頁。

³² Kinoshita, “Romans_Two Writings,” 258 n.1; 木下『新解』、11, 150 頁。

た³³。シュミットハルスによれば、現存のローマ書背後には下記の三つの書簡が存在している³⁴。

ローマ書 A: 1: 1-4; 25; 5: 12-11; 36; 15: 8-13

ローマ書 B: 12: 1-21; 13: 8-10; 14: 1-15; 4a, 5-6, 7; 15: 14-23; 16: 21-23

エフェソ宛て書簡: 16: 1-20

5: 1-11; 13: 1-7; 13: 11-14; 15: 4b; 16: 25-27 は、内容的に前後の文脈に適合せず、編集的挿入とされている³⁵。ローマ書をローマ書 A とローマ書 B に分ける主たる根拠は、ローマ書 1-11 章が信仰義認の教理を体系的に説いた論説であり、特に、ローマの教会の状況を反映していないのに対して、12-15 章が、ローマのキリスト教徒の置かれた状況を念頭に置いた勧告の手紙であるということにある³⁶。

16: 1-20 が元々はエフェソに宛てた手紙であると判断する理由は、訪問したことがないローマの教会に、この部分に挨拶の相手として挙げられている多くの人々を個人的に知っているのは不自然であるということにある³⁷。シュミットハルスによれば、この部分はパウロの使者として派遣するフィベに持たせた紹介状であり、それは当時の習慣に適合している (16: 1-2; I コリ 16: 3; II コリ 3: 1; 8: 16-24; 使 9: 2; 15: 23-29; 22: 5)³⁸。挨拶を主たる内容としていることも、紹介状には相応しいことである。エフェソ宛てであると判断するのは、挨拶の対象として挙げられている人々の中には、プリスカとアキラ (使 18: 1-3, 18-19; ロマ 16: 3; I コリ 16: 19)、エパネイエトや (16: 5)、アンドロニコスやユニアのように (16: 7)、エフェソ教会で活動していた可能性が高い人々が多く含まれるからである³⁹。

第一の議論は現存のローマ書の記述の流れの中には、前後の文脈とは繋がらないような部分があることを根拠としている。パウロ書簡は当時の書簡執筆の習慣に従って口述筆記されている (16: 22 を参照)。口頭で語られる言葉の常としてパウロの議論は必ずしも直線的には進まず、話題が逸れたり、関連の主題が間を置いて繰り返されたりすることもし

³³ W. Schmithals, *Der Römerbrief. Ein Kommentar* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1988) 25-29.

³⁴ *Ibid.*, 29.

³⁵ *Ibid.*, 29.

³⁶ *Ibid.*, 27-28.

³⁷ *Ibid.*, 546-547.

³⁸ *Ibid.*, 544-545.

³⁹ *Ibid.*, 547.

ばしばである。ローマ書に文書としてのより緊密な論理的一貫性を想定して、1章から15章までの本文を分解してローマ書AとBの存在を想定する必要はない。

第二の議論に対しては、先に「ローマ書16章と統一性問題」のところで確認したように、パウロはコリントやエフェソでローマの教会出身の信徒と接触する機会があったので（ロマ16:3, 5, 7; さらに、Iコリ16:19使18:1-3, 18-19を参照）、ローマの教会の信徒たちの間に多くの知人がいた可能性があることが挙げられる⁴⁰。シュミットハルスが主張するように、古典古代世界において挨拶だけを内容とした紹介状が存在した可能はあるが、ローマ16章を独立の手紙であるとする論拠としては弱く、むしろ新しい問題を作り出している。もし、この部分が本来はエフェソ教会に宛てた書簡だとすれば、先行するローマの教会に宛てた書簡と結び付けられた具体的な事情と理由を説明する必要が出てくるが、そのことについての首尾一貫した説明をシュミットハルスは提供していない。

結論

1. ローマ書の本文に関して、筆者はネストレーアランド28版が採用している1:1-14:23 + 15:1-16:23を最も原型に近い本文型として支持する。外的証拠からはアレクサンドリア型写本の多くが支持している1:1-14:23 + 15:1-16:23 (24) + 16:25-27の方が有力であるが、内的証拠から、この読み方が優先すると判断される。

2. ユダヤ人と異邦人の究極的救いについての記述である9:1-11:36は、後から挿入されたのではなく、初めからローマ書の構成部分として存在していたと結論される。9:1-11:36の部分は、修辞学的には、本題から一時離れて違う主題を取り上げる脱線(digressio)と評価出来る(キケロ『発想論』1.51.91; クウインティリアヌス『弁論家の教育』4.3.12-17)。

他方、この部分は書簡全体の主題とは共鳴している。業による義を追い求めたユダヤ人が義に達せず、異邦人がピステイスによる義を得ることとなったという9:30-10:4の記述は、論証部分を構成する3:21-28の内容の適用である。11:25-32に述べられているユダヤ人と異邦人の救いという結論は、書簡の冒頭部に提示された提題(1:16-17を参照)の成就を終末論的希望の視点より論じている。

第三に、16:1-20の部分は、ローマに宛てた手紙のコピーが後にエフェソへ送られる際に、添えられたエフェソ教会宛の挨拶文ではなく、ローマ書に当初から含まれていた構

⁴⁰ K.P. Donfried, "A Short Note on Romans 16," *Romans Debate*, 44-52; P. Lampe, "The Roman Christians of Romans 16," *Romans Debate*, 216-230を参照。

成的部分である。未訪問の教会に向けて書かれた手紙の末尾に、パウロはこれから親しい関係を築くために個人名を列挙した挨拶のリストを付したと考えられる。

第四に、木下順治や W・シュミットハルスらが提唱するローマ書は本来別々の文書が事後的に編集されたとする分割仮説は支持出来ない。現存のローマ書は一体として執筆されたものとする。

以上に検討した本文批判上、或いは、文献批判上の様々な問題は、古代書簡としてのローマ書の特異性を示しており、ローマ書理解の難しさと解釈の可能性の豊かさの両方を示しており、この重要なパウロ書簡を読む者に対して繰り返し、新たに深く考える契機を与えているのである。

参考文献

1. 個別研究

Aland, K. *Text und Textwerte der griechischen Handschriften des Neuen Testaments II. Die paulinischen Briefe* (Berlin : Walter de Gruyter, 1991) 447-451.

_____. *Der Text des Neuen Testaments* (Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft, 1981).

_____. “Der Schluß und die ursprüngliche Gestalt des Römerbriefes,” in ders., *Neutestamentliche Entwürfe* (München : Kaiser, 1979) 284-301.

_____. *Studien zur Überlieferung des Neuen Testaments und seines Textes* (Berlin : de Gruyter, 1967) 35-57.

Collins, R.F. “The Case of a Wandering Doxology : Rom 16, 25-27,” in *New Testament Textual Criticism and Exegesis* (ed. A. Denaux ; Leuven : University Press, 2002) 293-303.

Corssen, P. “Zur Überlieferungsgeschichte des Römerbriefes,” *ZNW* 10 (1909) 1-45, 97-102.

Debanné, M.J. *Enthymemes in the Letters of Paul* (LNTS 303 ; London : T & T Clark, 2006) 175-177.

Deissmann, A. *Licht vom Osten* (Tübingen : Mohr-Siebeck, 1923) 199-200.

Donfried, K.P. “A Short Note on Romans 16,” *Romans Debate* (ed. K.P. Donfried ; Revised and Expanded ed. ; Peabody, MA : Hendrickson, 1991) 44-52.

Elliott, J.K. “The Language and Style of the Concluding Doxology to the Epistle to the Romans,” *ZNW* 72 (1981) 124-130.

- Gamble, H. *The Textual History of the Letter to the Romans* (Grand Rapids : Eerdmans, 1977).
- Goodspeed, E.J. "Phoebe's Letter of Introduction," *HThR* 44 (1951) 55-57.
- Horn, F.W. (Hg.). *Paulus Handbuch* (Tübingen : Mohr-Siebeck, 2013).
- Hutardo, L.W. "The Doxology at the End of Romans," in *New Testament Textual Criticism : its Significance for Exegesis* (FS. Bruce M. Metzger ; eds. E.J. Epp and G.D. Fee ; Oxford : Clarendon, 1981) 185-199.
- Kinoshita, J. "Romans_Two Writings Combined : A New Interpretation of the Body of Romans," *NovTest* 7 (1964-65) 272-277.
- Knox, J. "A Note on the Text of Romans," *NTS* 2 (1955-56) 191-193.
- Lake, K. *The Earlier Epistles of St. Paul* (London : Rivingtons, 1919) 325-370.
- Lampe, P. *Die stadtrömischen Christen in den ersten beiden Jahrhunderten* (WUNT 2.18 ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1987).
- _____. "Zur Textgeschichte des Römerbriefes," *NovTest* 27 (1985) 272-277.
- _____. "The Roman Christians of Romans 16," *Romans Debate* (ed. K.P. Donfried ; Revised and Expanded ed. ; Peabody, MA : Hendrickson, 1991) 216-230.
- Longenecker, R.N. *Introducing Romans : Critical Issues in Paul's Most Famous Letter* (Grand Rapids : Eerdmans, 2011) 30-38.
- McDonald, J.I.H. "Was Romans 16 a Separate Letter," *NTS* 16 (1969-70) 369-372.
- Manson, T.W. "St. Paul's Letter to the Romans and Others," *Romans Debate*, 3-15.
- Mathew, S. *Women in the Greetings of Romans 16.1-16 : A Study of Mutuality and Women's Ministry in the Letter to the Romans* (London : Bloomsbury T & T Clark, 2013) 3-4, 37-45.
- Metzger, B.M. *A Textual Commentary on the Greek New Testament* (2nd ed. ; Peabody, MA : Hendrickson, 2006).
- Michaelis, W. "Die Teilungshypothesen bei Paulusbriefen : Briefkomposition und ihr Sitz im Leben," *TZ* 14 (1958) 321-326.
- Ollrog, W.H. "Die Abfassungsverhältnisse von Röm 16," in *Kirche* (FS. G. Bornkamm ; hrsg. v. D. Lührmann / G. Strecker ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1980) 221-244.
- Schenke, H.M. "Aporien im Römerbrief," *ThLZ* 92 (1967) 881-884.
- Starnitzke, D. *Die Struktur paulinischen Denkens im Römerbrief. Eine linguistische-*

logische Untersuchung (Stuttgart : W. Kohlhammer, 2004) 477.

Stuhlmacher, P. “Die Abfassungszweck des Römerbriefes,” *ZNW* 77 (1986) 180-193.

Wedderburn, A.J.M. *The Reasons for Romans* (Edinburgh : T & T Clark, 1988).

Weima, J.A.D. *Neglected Endings : The Significance of the Pauline Letter Closings* (JSNT-Sup 101 ; Sheffield : JSOT, 1994) 135-136.

2. 注解書

Barrett, C.K. *A Commentary on the Epistle to the Romans* (London : Black, 1957).

Byrne, B. *Romans* (Sacra Pagina 6 ; Collegeville : The liturgical Press, 1996).

Cranfield, C.E.B. *The Epistle to the Romans* (ICC ; 2 vols ; Edinburgh : T & T Clark, 1973-1979).

Dodd, C.H. *The Epistle of Paul to the Romans* (London : Hodder and Stoughton, 1932).

Dunn, J.D.G. *Romans* (WBC 38A-38B ; 2 vols ; Dallas : Word Books, 1988).

Fitzmyer, J.A. *Romans* (AB33 ; New York : Doubleday, 1993).

Haacker, K. *Der Brief des Paulus an die Römer* (ThHNT 6 ; Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 1999).

Hultgren, A.J. *Paul's Letter to the Romans : A Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 2011).

Jewett, R. *Romans* (Hermeneia ; Minneapolis : Fortress, 2007).

Johnson, L.T. *Reading Romans : A Literary and Theological Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 1997).

Käsemann, E. *An die Römer* (HbNT 8a ; 2. Aufl. ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1973).

木下順治『新解 ローマ人への手紙』聖文舎, 1983年

Kruse, C.G. *Paul's Letter to the Romans : A Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 2012).

Lietzmann, H. *An die Römer* (HbNT 8a ; 4. Aufl. ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1933).

Lohse, E. *Der Brief an die Römer* (KEK ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2003).

Matera, F. *Romans* (Grand Rapids : Baker, 2010).w

松本治三郎『ローマ人への手紙 翻訳と解釈』日本基督教団出版局, 1966年

Michel, O. *Der Brief an die Römer* (KEK ; 12. Aufl. ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1966).

- Pate, C.M. *Romans* (Grand Rapids : Baker, 2013).
- Sanday, W. / A.C. Headlam. *The Epistle to the Romans* (ICC ; 5th ed. ; Edinburgh : T & T Clark, 1902).
- Schreiner, T.S. *Romans* (Grand Rapids : Baker, 2004).
- Schlier, H. *Der Römerbrief* (HThK 6 ; 2. Aufl. ; Freiburg : Herder, 1979).
- Schmithals, W. *Der Römerbrief. Ein Kommentar* (Gütersloh : Gerd Mohn, 1988).
- Stuhlmacher, P. *Der Brief an die Römer* (NTD 6 ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1989).
- 田川建三『新約聖書 訳と註 4』作品社, 2009年
- Theobalt, M. *Der Brief an die Römer* (2 Bde. ; Stuttgart : Katholisches Bibelwerk, 1992-93).
- Wilckens, U. *Der Brief an die Römer* (2.Aufl. ; EKK VI/1-3 ; Zürich : Benzinger ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1989).
- Witherington III, B. *Paul's Letter to the Romans : A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids : Eerdmans, 2004).